

「千葉氏

語る「だより

平成28年度

第3号

発行・編集

千葉氏を語る会事務局

発行日

平成29年3月10日

シンポジウム開催される

本会恒例のシンポジウムが十二月三日(土)千葉市文化センターで開かれ約百人の参加者を前に峰岸純夫氏と丸井敬司氏が二時間に亘って基調講演を行った。その後浜名徳順氏の司会で上記二氏に吉野秀夫氏と斉藤慎一氏が加わり「関東の城郭と猪鼻城」と題して四氏によるシンポジウムが行われた。かなりアカデミックな学説、お話があり有意義な議論がなされた。そのうち峰岸先生の基調講演で「関東の城郭(城館跡)形成とその画期」と題するお話は大変分かり易かったので、此処にその要旨を再現したい。

中世の武士の拠点を考える場合、館と城(併せて「城館」)がある。その展開を時代とともに考えてみたい。第一、館の展開

十一世紀の荘園公領制の発展、それを現地で支配する下司・地頭と称

する武士が成長・発展する中でその支配の拠点に設置された館が出現する。館は方形館と称されるが正確な方形ではなく、やや大形状のものが多く、また東北隅を少し削って、悪霊(鬼門)の侵入を防ぐと言うものもあつた。

十二世紀以降鎌倉時代は幕府成立などもあつて武家の方形館の時代と言つてよい。館の内部には当主の起居する建物や従者の居住の場、厨などがあり、広い空間の庭園があり、時として軍勢の結集の場となつた。有力武士は、各本領に館を持つ一方で都市鎌倉の中に館を構えた。源頼朝に随従して関東に下つた安達氏は鎌倉甘縄に館を構えた。蒙古襲来(文永の役)の後に、功績による恩賞を求めてやってきた九州の竹崎季長は、

この甘縄邸の安達泰盛を訪れた様子を「蒙古襲来絵詞」に記録している。

この邸宅の部分は、館内の泰盛邸家屋を記したもので、門外で馬から降りた季長主従が堀に掛けられた橋を渡り、門の所で出迎えた安達氏家臣王松氏に挨拶し、家臣団控えの間の南面の庭で待ちやがて泰盛に謁見する。甘縄館は、堀と土塀に囲まれたものであることが判る。次は下野国足利荘の鏝阿寺は「おとり町」という東山道の町場から北に入った所で二町四方(台形)の方形館があり、幕府の要人足利義兼の館が没後に寺になり、館跡の周りに十二院が建ち、一年交代で年行事を勤めた。「館寺」という

第二 今小路西遺跡跡(鎌倉御成小学校)は誰の館か

JR鎌倉駅西にある今小路西遺跡は、昭和五十九年から六十年(一九八四から五)に御成小学校改築問題と絡んで緊急発掘され鎌倉郡衙と武家屋敷の発見となり、後者から大量の輸入陶磁器などが発見された。出土遺物のなかに板番文が発見され、五味文彦氏「中世考古学の視線」(二〇一七年刊行予定、高志書院)では多の番文と併せて、近くの無量寿院

資料一 今小路西遺跡出土板番文

定

もうすけ 小屋門番 勤仕
し□□□殿 こや門はんきんしの事
左衛門

一番 飽間の二郎さえもん殿

潮田の
うしおだの三郎殿

佐々木 多右衛門
ささきのたえもん三郎殿

粕谷の
かすやの太郎殿

二番 新作の
しんさくの三郎殿

余部 左衛門
よべぎやうふさえもん入道殿

三番 小殿
大小殿

右・番のむねをまはりて、けたいなく一日
勤 守 遅怠

一夜御つとめあるへきのしよう・如件
文永二年五月 日

(御成隧道東にあつた無量寿院(廃寺)において安達義景十三回忌(六月三日)において法要の際の「一番文」と推定している。この番文の一番冒頭の飽(秋)間二郎左衛門は、安達氏の有力家臣と推定される。弘安八年(一二八五)十一月の霜月の亂で、北条氏と平頼綱(禅門)に滅ぼされた時の記録があり、安達泰盛(館は甘縄)は、松ガ上(谷)に留まっていたが、その後の行動によつて「塔ノ辻ノ屋形」(館)に出た所を北条貞時に攻められて滅亡したという。この塔ノ辻は今小路と長谷小

安達泰盛亂聞書 ○熊谷直之氏所藏梵口
戒本疏日珠抄裏文書
(覚真、安達泰盛) (安達宗景) (安達長景)
城 入道 井城助・美乃入道
(安達時景)
・十郎判官入道、一門皆被伐了、奥州入道
(弘安八年十一月) (谷)
十七日已廻マテハ松カ上ニ住、其後依世中
動、塔ノ辻ノ星方へ午時ニ出かけるニ、被
(北条貞時)
参守殿云々 死者卅人手オイ八十人許
判官
□□□□□□□□□□テ城十郎入道ユヤマへ

路の交点で御成小学校の南に位置し、この遺跡の屋敷は、安達氏の屋敷と考えて良いと思う。(泰盛、宗景) 安達氏館を中心に、家臣団、被官屋敷、商業地区が配置されている。
第三 城郭の形成
南北朝内乱期の戦乱が恒常化する地域では、城郭の形成が見られるが、やはり本格的な長期戦乱(享徳の乱)を画期として多くの城郭が出現し、戦国時代に至る。
① 館から城へ
中心の館の周囲に縄張りを拡大して外構、内構の城郭が形成される。(例、群馬太田氏反町城) 原形は新田岩松氏一族の堀口氏館跡と考えられるが、それが改造されて反町城と

なり戦国期には金山城由良(横瀬)氏の支城となった。近世に入って照明寺の中に移築した。
② 館の背後丘陵に城
館の背後一キロほどの山上に五つの郭から成る山城を築く。郭と郭の間に、堀切を設ける。敵が襲ってきた場合に資材や食料を運んで籠城する。

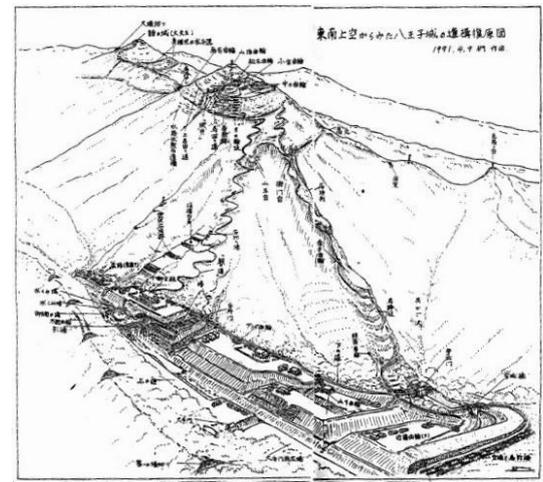
③ 水辺(沼)を活用した城
館林城は、南の城沼といわれる広大な沼を利用し半島状に突き出した八幡郭・本丸・二の丸・三の丸を構築し、その北側に水路を隔てて外郭を設ける。その北側には広大な四つの郭を設け、その内部は家臣団屋敷、商職人の屋敷が包蔵され、それらを外構堀をもって囲む。享徳の乱とそれ以降の合戦において攻防戦となり、度々の落城を体験した。近世大名の城郭となった。

④ 河川崖上の城(崖端城)
栃木県小山城は、小山市の思川北岸にある。河川に削られた急崖を西の防備とし、東側は堀を持って囲む。そこに四つの郭と高台をなす二カ所に郭(天守郭)で構成される。南北朝期、小山義政の亂の攻防の場とな

りそれ以降の戦国期まで、下野国最大の豪族小山氏の拠点となった。
⑤ 山城と下の館空間を統一した戦国期の城郭の完成形
八王子市の研究者棚田国男氏の「戦国の終わりを告げた城」(六興出版一九九一年)の復元図(鳥瞰図)によれば、八王子山の下には、御主殿といわれる城主豊穰氏照の館が有り、その東にアシダ曲輪、山下曲輪などの軍勢の終結できる空間が有り、さらに東には近藤曲輪など家臣団の集住地がある。天正十年(一五八二)にほぼ完成し、天正十八年に豊臣秀吉の侵攻を受けて落城した。八年間の城であった。

四 むすび
城郭構築には、領内百姓の動員、城内には百姓が食料や財産を持って立て籠もる百姓の郭も必要である。

一ロメモ
現在鋸南町に江月という所がある。此処は、源義経が京都へ攻め上るとき佐々木高綱と梶原景季が、宇治川の先陣争いで名馬「池月」と「磨墨」が活躍した。この池月こそがここ江月の生まれたところだと言われている。



相馬野馬追見学会報告

日向安昭

平成二十八年七月二十四・五日と会員二十五名、バスで福島県南相馬市の年中行事である野馬追を見学した。南相馬市の博物館では、丸井先生の懇意である主任二本松文雄氏から、南相馬の千葉氏と野馬追について丁寧な説明を受けました。野馬追祭の絵巻や、古文書など貴重な資料を拝見することが出来ました。

野馬追祭の見学は、博物館の隣が会場で祭りが始まり出している時に会場につきましましたが、指定席であったため、会馬全体を見通せる良い場

所で見る事が出来ました。空中から旗が降りてきて一斉に馬に乗った人達が旗めがけてはしりだす、神旗争奪戦は見応えがありました。九曜紋の目印の旗をつけている武者もおりました。南相馬市長桜井勝延氏に向後会長のご挨拶文を手渡ししました。

御祭終了後、中山神社から歓喜寺に行き住職様の講話を聞きました。

丸井先生と懇意であったため非常に懇切丁寧な説明でした。亀の上に乗っている妙見菩薩を拝めることも出来ました。宿泊は塩屋崎で一泊し、翌日みだれ髪 of 歌碑、北妙見尊を見学し帰路につきました。

なお、今回は東北大地震の爪痕や震災復興の現状を目のあたりに見ることが出来ました。南相馬市の手前の双葉町は帰還困難地域で、放射線量が四ベクトル（手前は〇、一）の高速道路を通過しました。バスの窓からは人影は見られず、死んだ街でした。また宿泊した塩屋崎は津波のすごさを感じました。南相馬市も震災の影響が多かった地域ですが、生活環境が変わってもその地域の心の支えの一つが「祭り」で祭りをを行うことで地域の復興が進んでいることを感じました。



千葉市を元気にするミニ

シンポジウム開かれる

千葉市民活動支援センターの主催で、千葉を売り込む！チバ魅力発見伝というタイトルで平成二十九年二月二十五日千葉市きぼーるの十一階で市内六団体が参加して開催された。最初は参加各団体がそれぞれ所属会の魅力を発表して意見を出し合い、チバの魅力を見ようという趣旨で参加しました。「千葉氏を語る会」の紹介、千葉氏は魅力があるのだ、その魅力を形にしようというグループ参加の呼びかけをしました。グループ参加者十一名（他は五名か六名）でした。そのうち一人が本会入会のしおりが欲しいとのことでした。次に約一時間かけて千葉氏の魅力を、どう広げたら良いかを話し合いついてその結果を次のように模造紙にまとめてみました。

○千葉開府九〇〇年祭、

○千葉より広まった「郡上踊り」の復活

○蓮池天女伝説

○千葉宗家を忍ぶ武者行列

○千葉一族集まれ！子孫を探そう

○結城船、千葉船の行列

○川柳による千葉笑いの復活

○中世の衣装・料理の再現

○千葉駅に常胤像の建立

○頼朝が歩いた路の再現

○駅前の地下道に千葉氏関連の

資料展示

○中世鎌倉時代の千葉館の再現

このように千葉氏に関する千葉の魅力発見伝のアイテムをまとめました。そして各グループと共に発表して大変好評を得ました。今後千葉常胤生誕九〇〇年、三年後の東京オリンピック、九年後の千葉開府九〇〇年に向けてアクションプランを考えたいと思います。



千葉開府祭に寄せて

千葉氏を語る会 宮本明正

大治元年六月朔(一一二六年六月一日)、千葉介常重が、大権から千葉へ本拠を移してから今年で八九〇年の節目にあたります。

千葉市は、六月一日を「千葉開府の日」と定めて、八九〇年記念の催しが各所で行われています。

「千葉市の歌」には、この大治元年のことが詠われていますが、今ではこの歌の存在とこのメロディを知る人は少ないと思います。折角の機会ですので、ご紹介します。

一、波路遙かに 環る黒潮

豊げく拓く

房総の野の

見よ見よ見よ

文化の集い

猪の鼻山の

袖師ヶ浦の

語り伝うる

いまいまいま

時代に立てる

環る黒潮

天産の国

輝く都

滔滔と新興の

吾が千葉市

松風遠く

寄せくる波に

大治のむかし

澗刺と新しき

吾が千葉市

三、朝霧はれゆく

寒川沖を

希望の風に 白帆を揚げて

心あわせて 漕ぎゆく如く

あゝあゝあゝ 玲瓏と建設の

意気高らかの 吾が千葉市

この歌は、昭和四年十月に決まったとのことなので、今の時代にはそぐわない箇所もありますが、二番では千葉氏の始まりがチャンと詠われています。(大治(だいじ)は「たいじ」と振り仮名がされていますが、濁音を避けたのでしょうか)。

これを昭和二十八年頃、小学校の「音楽の時間」に習い歌いました。意味も良く理解していなくとも、校歌を歌う時のように、何故か誇らしげに歌った記憶があります。

因みに、この「千葉市の歌」の出来た翌年の昭和五年に行った国勢調査での人口は、四万九千余人とあります。

歌の話をもうひとつ。大正十五年(一九二六)六月には、「千葉開府八〇年祭」が盛大に催されたとのことですが、この時、北原 白秋が書き下ろした「千葉八百年祭の歌」があります。

祝へや祝へや八百年の

千葉市の祭りはけふこの日

わっしよ わっしよ わっしよ

わっしよ けふこの日

祝へや祝へや猪鼻城の

かがやく若葉よ日の光

わっしよ わっしよ わっしよ

(以下略)

「千葉開府八五〇年祭」では、昭和五十一年(一九七六)六月に、千葉城址の郷土博物館前の広場で式典が行われたとあります。(前年の昭和五十年に行った国勢調査での人口は、六十五万九千余人とあります)。

この年の八月に、八五〇年を記念して第一回「千葉の親子三代夏祭り」が開催され、以後毎年行われるようになりました。

今年、開府八九〇年記念として、この夏祭りにあわせて、八月二十一日に、千葉常胤とその子、孫たちの「千葉氏」にゆかりのある地、北は岩手県一関市、南は佐賀県小城市までの十一市町の首長が参加する「千葉氏サミット」が開催されました。千葉氏に関する「講演・パネルディスカッション」と「首長フォーラム」

では、大いに語り合い、互いの連携についてなど、話し合いました。

十年後の大きな節目の、「千葉開府九〇〇年祭」に向けて、歴史的資源・資産を大切・大事にして、さらに考証を重ねて、誇らしい「吾が千葉市・千葉氏」の一層の発展と深耕で、千葉市の目指す「都市アイデンティティ戦略」＝千葉市らしさが感じられるまちへ、この機運を大いに高めたいと思う次第です。

なお、猪鼻城址(含 七天皇塚)は、昭和三十五年三月に千葉市指定文化財の第一号となり、同日付では千葉神社境内、千葉寺境内(三件は共に史跡)など、千葉氏ゆかりの地が同時に指定されました。(了)

九州千葉氏

千葉氏を語る会 江波戸弘安

(九州とのかかわり)

千葉氏が九州と関係を持ったのは、治承・寿永の役(源平の争乱)つまり源頼朝挙兵以降の全国的争乱の状況の中で千葉常胤が非常に大きな活躍をした結果、東国御家人の重鎮として下総国守護となり、主に東北地方諸国の他全国的に所領を得た。

文治年間(一一八五〜九〇)薩摩、大隅、豊前にも所領を獲得したが、肥前小城郡の地頭職もその一つである。肥前小城以外の所領は、その後千葉氏内の混乱などもあり他の東国武士団へ移ることになったが、小城は鎌倉時代を通じて千葉氏の手から離れず本宗家に相伝された。

(九州への入部)

千葉氏の小城郡支配は常胤から泰胤までの代は「代官」を派遣しての支配であったが、頼胤の時蒙古が襲来し、東国御家人は九州への下向が命じられた。頼胤は文永の役の傷がもとで建治元年(一二七五)八月小城で死亡する。代わって嫡子の宗胤が下向し弟の胤宗が本国下総に残ることとなる。宗胤は同時に大隅国守護であり大隅御家人を指揮して筑前

国今津の異国警備番役を命じられるなど、行政能力・国内武士統治能力を備えており、着実に地元に着した形でその支配を進めてきたが、永仁四年(一二九四)一月逝去する。宗胤の嫡子胤貞が正和五年(一一三一六)下総所領の多くの家臣を伴い小城に下向する。

常胤……頼胤——胤宗——胤胤——胤胤(下総)
宗胤——胤胤——胤胤(肥前)——胤胤

(千葉氏の信仰)

千葉氏とその家臣の下向は(小城移住)は彼らの信仰する日蓮宗と妙見信仰がこの地に根付くことになった。光勝寺を日蓮宗の九州進出の拠点・中核寺院として近世・近代に開基を持つ寺院は数多く、千葉氏の支配地域が拡大するとともに広がっており、大きな影響を受けながら機能してゆくことになる。千葉一族、家臣にとつては日蓮宗と妙見信仰とは一体であり、中世武士が八幡を信仰するのと異なり、妙見を信仰するのは特異なことである。

(南北朝の動乱と千葉氏)

胤貞は建武新政時、足利尊氏方として各地を転戦、一方の下総の胤胤は新田義貞方にあった。この両者の相違はそのまま頼胤後の千葉氏の確執、内訌となつて続いていたが、胤貞がその後尊氏方に帰属したので両

者の内訌おさまる。八幡・臼井庄はその間に胤胤系に押さえられることになり千田庄だけが胤胤系に伝領された。本格的に小城支配を進めるのは胤胤の後を継いだ胤胤である

にしていた風景に出会ったかのような懐かしさを感じるものである。鎌倉時代に東国から九州などに西遷した武士は本拠の景観を懐かしみ、それを模した都市プランを構想した。下総千葉のそれは鎌倉をモデルにしたものと見られる。(他説では逆に鎌倉が千葉を模したとされる)北に八幡社と金剛授寺(後の妙見寺、現在の千葉神社)を置き、そこからメインストリートが南に伸びる今の本町通りが基本構造である。

(千葉と小城の都市づくり)
小城と千葉の都市景観はよく似ている。両者とも街の中心付近の台地上に「千葉城址」があり、その麓を千葉では北側に都川、小城では反対の南側に祇園川が流れている。小城の千葉城址の西端にある須賀神社は、もとは祇園社と呼ばれたもので、山挽行事を伴うような祇園社の祭礼が今でも続いている。千葉でこの祇園社に相当するのは本町一丁目に所在する八坂神社で、ここで行われた祇園会が千葉氏の守護神である妙見宮の祭礼と一体化したものが、今日の千葉神社の祭礼につながるものと考えられている。

胤胤は千葉氏正統の立場からこれを小城に引き写すと共に京都文化の導入を積極的に行い進め、今日「小京都」と呼ばれる都市景観の基礎を構築した。

千葉神社は千葉氏の守護神である妙見を祀った神社だが、小城には「千葉城址」からほとんど同じ方向に北浦妙見社がある。小城は景観が千葉に似るところがあるだけではなく、今日でも千葉氏関係の寺社、遺跡が数多く残されており、変貌の激しい千葉市街地を故郷とする者が小城を訪ねると、誰しもが子供の頃毎日目

たと思われるが、ライブルである胤胤の動向を常に意識しながら千葉の都市整備を進めたと思われる。かくして千葉と小城はともに千葉氏によって共通の「一卵性双生児」的空間構造を持った都市が成立したものである。

房総における古東海道

高野利太郎

東海道を初めとする七道には、駅路に沿って三〇里（約十六キロ）ごとに駅家がおすれ、駅鈴を所持した

駅使と呼ばれる使者が駅馬を利用し、中央と地方との連絡を行っていた。

官道は、大路（山陽道のみ）・中路・小路に区分され、大路の駅家には二

〇頭、中路の駅家には一〇頭、小路の駅家には五頭の駅馬が配備された。

房総三国の駅路が属した東海道は中路とされた。又これとは別に、郡家

ごとに伝使と呼ばれる使者のために伝馬が各五頭配備されていた。伝馬

は、諸国の間を結び文書を運送したり国内を連絡する使者が利用した。

房総三国には「延喜式」によると

安房国 駅馬 白浜・川上各五頭

上総国 駅馬 大前・藤瀧・嶋穴・

天羽各五頭

伝馬 海上・望陀・周准・

天羽の各郡五頭

下総国 駅馬 井上・一〇頭、浮嶋

・河曲各五頭、茜津・

於賦各一〇頭

伝馬 葛飾郡一〇頭、千

葉・相馬の各郡五頭

この「延喜式」の規定は、駅制の改変を経た十世紀のものであるが、これ以前に見える駅として次のような駅もある。

上総国市原郡大倉駅（「正倉院」文

書丹裏文書、天平勝宝五年七五三

年六月十五日）

下総国印旛郡鳥取駅、埴生郡山片方

駅、香取郡真敷駅・荒海駅（一日

本後記）延暦二十四年八〇五年十

月庚申条）

史料に残るこれら一六駅が房総三

国に設置された駅家であるが、遺跡

として確認された例は無く、その位

置は地名などから想定されている。

これらの駅家を結ぶ駅路は、「延

喜式」に至るまでに三期の変遷を経

ている。その第一期は、大宝令の成

立から、武蔵国が東山道から東海道

に編入された宝龜二（七七）まで

の時期である。東海道は、相模国か

ら安房国（養老二年七一八年上総国

から分立）・上総国を経て、下総国

に至る経路を取り、武蔵国から下総

に至るルートは支線であった。

この論文はある学説をそのまま転

記したものであり、これからの研

究・調査が待たれるであろう。

会員の皆様へ知らせ

■一、総会開催について

本年度の総会は来る五月二十日

（土）千葉市市民会館において行われ

ます。詳細は別途通知します。

■二、ホームページの開設

本会では本会では会員皆様の利便

性と会の実績、事業内容を広く広報す

るため近くホームページを開設しよ

うと準備中です。利用開始は五月中に

な上総国市原郡大倉駅（正倉院文書

予定です。

■三、勉強会の開催について

前年度は初めての試みとして、五回

の勉強会を行いました。本年も又続

けていきたいと考えています。

■四、会員の募集について

◆新規会員募集をしています

◆年会費 三千元

◆活動 講演会 現地見学会 等

◆連絡先 事務局長 日向安昭

090-8305-6601

編集後記

編集子

大変遅くなりましたが、会報第三号をお届けします。平成二十八年度

は本会は福島県南相馬市への現地見学や市民活動支援センター主催のミニシンポジウムへの参加等他種グループとの交流を含め、本会も大きく躍進した一年であったと想います。このミニシンポジウムでの実績は他の活動範囲の異なるグループではありませんが、群を抜いていたのです。千葉氏の歴史研究とその理解を深めより多くの市民が郷土への愛着を持つ事が意義あるものと考えます。これからも会員の声を反映した編集方針で発行していきたいと想います。今後とも会員の皆様の原稿をお寄せ下さい。

